俳諧二葉問答 坤

ヘ 5
2249
2

片歌二夜問答序

おもし宝暦てふ年の末つ吸霞庵主綾足(アヤタリ)ぬし越(コシ)のくに見むとて毛野の國へとて眼ざしを廣くやすらひば里秀いくさ里に何所(ドコ)里たまゆらにくしくいぶかしおもひしまゝにずくさひまいらせ侍れ。其意へあまりそこへゆかいまてぐさく好ましてまたすくへと侍るに。いとだいくしとるむさい絹のまかいつけくたべ考も見むくへぬやにかくれにはしるぞとて人に学ともせ言のまにく此語よがよの冊子(サウシ)一ひらとなりぬ又二夜問答といふなづぞにゝつけて名とするぞ

上毛野鶏橋図府　四云庵素輝記

へ
刊5
2249
2上

○某梅問 俳諧てふものゝ興(オコ)を深いづれの時よりぞ

○綾答 俳諧れ和はん漢審(ツバラ)にいはゞ何の時よりといふべからず

まづ今茲(ホ)そもその興(オコ)り起は素より

およそ旋頭歌(セドウカ)のことば上半(ナカラ)にして一句をも除八日本武尊(ヤマトタケルノミコト)の言

挙(アゲ)是非あれとしまする短歌(ミジカウタ)の詞を上半(ナカラ)にして一句をもて古

事紀に出されたるにも此旋頭歌は体(テイ)なるべしの名を片歌(カタウタ)

といふ

旅いにしへの歌は体(テイ)をすぐ別(ワカ)て字名もなし この由来に志(ココロザシ)ぬ

あらはしたるを演(ノブ)るものハ皆まへ句といひ詞(ツヾリ)の数は定まらざりしを
其体(テイ)の定まりなきをもさしおきて長歌(ナガウタ)とし又三十一言を短歌(ミジカウタ)
とし三十八言を旋頭歌(セドウカ)といひしより片歌の名もあらはれ来し歟
べし皆後の人のなせしものなり後にいふ言ハ
先(サキ)を思ひいたる片歌ハ自然に出たる詞にて飾(カザ)りも冠(カツムリ)もなく
律(リツ)もなし余(ヨ)く見れバたえて旋頭歌も短歌とも分ちあるべし
あるやおのれにむかへる事見ゆる事をもまれにつきて法をしへよく
事をも正(タヾ)さずかく今やうなる迷はずに言ふことむやみに
を俳諧とまぐいひもてさわぐよこしまにもなるにてなるを

くみて一トむきに家を立る法ハあらんぞや。すべて古今集に
俳諧体(ハイカイテイ)と名づけて撰(エラ)べる歌あまたあり。詠ざまやしくおもむきを
異にせり。今やう片歌ハおほくハ此詠の体(テイ)より出て案(アン)じすぐりてなすべ
きの為ぞ俳諧といふなる。俳式(ハイシキ)てふものハ連歌にあらはれたるにて
別に俗談平話(ゾクダンヘイワ)をもてしかし俳諧の家を立てゝあらそふ事久し。近世変ゆる
の文者あまたして滑稽伝(コウケイデン)に源(ミナモト)をたてゝ俳諧の文字に理(コトワリ)をつけて
諷諫(フウカン)をもいひ談笑(ダンセウ)をもいへれバ漢土の例(レイ)に倣(カラリニ)たて安く文考
が論に見るが如き説のハ甚違(タガ)へる誹諧(ヒカイ)の文字によることなしといひ
源を古今集に立てといふハ皆俗説に似び筆の甚違(タガ)へる所なり。

たゆまず。ある道が俳諧なる事と唱ふ侍者おほし

○問 上古の片歌をしめせ

○答 いにしへの傳書に出侍るの多しされど一首二首をあげむ

波斯祁夜郎和岐幣能迦多由久毛韋
多知久母

上代之片歌数首見古今片歌明題集

あれ日本武尊様にいまして詠たまへ侍る片歌し爰にはそれ也らの意を解む

波斯祁夜郎とハ愛すといふ義なり和岐幣ハ吾か家し迦多由とハ方より雲しく毛韋ハ雲し多知久母ハたち来侍

の意し

様にあつて古郷を思ふ身ハ吾か家の方より来る雲を詠ふ

愛すといふ意なれば古今詠人の情ハ一しきに相おなじ

して情の事をも見侍べし

勇今よりを旋頭歌の片歌と唱ふ侍ハ十七字なる侍が短歌なりしく

しかるに今もよ侍れ比發句とし侍て十九言なる侍ハあやまりてあれ

ども今出来ぬあしくなるしかるに別なむために旋頭歌の片歌と唱ふ

まべて十九言十七言十四言なる侍も皆片歌の名目を志遊し

○問 盤渓禅師を俳祖と志てまず書置し事ハ何

○綾足　世の人芭蕉を俳祖ともいふは、あやまりなりといふ説(セツ)にはあらで。俳仙窟(ハイセンクツ)に渓(ケイ)禅師といふありて、禅師は貞徳(テイトク)の師範(シハン)なりしが、はじめて連歌の雅言(イサコト)を俗語に更(カヘ)しそれを俳諧といひはじめしかば、祖ともいふべし。今俳諧の名をたゞ人も禅師は俳諧の祖といはん、むべなるべし

○梅間　古(イニシヘ)の片歌を実に季あるべし。今やうにも当季をいふべく事ありや

○綾足　古の片歌は季あるものにもあらず。綾足のよめる片歌を見よかし。されど片歌にはあらで連歌にありしがごとく今もいふ歌の

大に異なるなり。さて雑(サウ)と季節のことは、連歌も旋頭歌も季をいふ歌ことなるを必とせざれば、今やうの片歌は季節をも心とし、蓋(ケダシ)季節をいふ歌こそは、連歌と片歌との異体(イテイ)なりとしるべく。又今やうなる世のともいはむ所にはたゞそのむねをのみいはんとして、たのしみ志なる歌は、季節を必ともせぬも理(コトワリ)ありたとへば雑なる歌あつけさにも、興をつくす歌なるは冬をおもひ、暮(ユフグレ)はかなしみをなしけるも、季有くもあるべきを、老ふさる歌は季節より冥(タメシ)をも出さず、歌は是かなればせらばたゞたのし

○梅間　名所は雑の句もありとしては、芭蕉の翁杖つき坂におもひそめて

さりと今此例にならふべしや

○綾足 芭蕉ハ名所に季節の如くいひをむすびて一句の案にもつくハしらむとしおに理あるなれバなり

我今これをいましめむとならバ名所にかゝはらずとも雑にも慥あるも却て広からん今の如季節を必ず添ゆるよりハ今やうの片歌をもとハ先に言へし詠のおもしろく片歌に意句もなくさうハ意句ハ雑にも去らんまで意にあらバ名所をもへり更にハ去らへかやうに片歌よみむとせば人ハかならず季節都添へつゝ

○梅問 今やうの片歌続句あらバいはして人もなめしあらんや

○綾足 日本武尊甲斐の酒折にして　古事記説

迩比婆理都久波袁須疑弖伊久用加泥都流

時に御火焼の老人此御歌を続て

迦賀那倍弖用迩波許許能用比迩波登袁加袁

今これ此句の意を解む

迩比婆理ハ都久波の冠辞にて言都久波を経ひて甲斐の酒折の宮にまでいたりつくまでいくばくの日数ぞ経ぬるといふ

夜ヵ寐(イ子)ぬるとあるは意しかのづらく困労(コンロウ)しなるをいふにや

うた也

また御火焼の老人か歌ハ迦賀那倍弖(カガナヘテ)といふハ考へて此ことば望

能く鑑(カンガエ)みれば又屈並(カヾミナヘ)てのこゝろあるべし指(ユビ)を屈(ヲル)ことにぞ

それハ指を屈(ヲリ)てかぞへ算(カズ)ふる意にて日をかぞへて十日(トヲカ)し今歳(イ子)

まづ寐(イ子)ぬる夜を云ふ意にて算(カズ)ふれば九夜(コヽノヨ)なるを

是より先(サキ)にも記したるは又萬葉巻廿八に尼のよめる歌

佐保河(サホカハノ)之水乎塞上而(ミヅヲセキアゲテウエシタヲ)殖之田乎

大伴宿祢家持(オホトモノスクネヤカモチ)刈(カ)れる早飯者(ハヤイヒハ)ひとり次(ツギ)て続くと申して

苅流早飯者(カルワサイヒハ)獨奈流倍思(ヒトリナルベシ)

於是今やうに修てかれを塞(セキ)とく因(ヨ)て殖(ウエ)けるかは世の歌人

此例によりひとつの句を挙(アゲ)て下の句をつゞけ下の句を出して上の

句をつゞけらる此例也

○梅問　連歌のおこりはおの次第を申し給へ　又前の句を上の

続(ツギ)く事下(ベキ)をつゞくる古(イニシヘ)にも例ありや

○後答　此例古にもなし　今の世に申すものハ連歌によりしくべし

されどもまたハ雅言をつらぬ詞を古歌によりて物語によりて(タヾ)

俳諧をもちてはおのが心を俗談(ソクダン)に言ひて其源(ミナモト)を

筆とるをも続くるハ為に目を貴ぶ男子にあらず哉と
いふべし。昔ハしく意を選び思ひしかど、今の人を宮体に
ことを以んだ人ハ只興ずるに億て、かならず雅心を失ふべしと。
無月は源き心をかくして巻てふ趣を敷へしかバ、済ちも世に
言を繋し。されバ世にあるほどの俳諧とハ異なる事を、今の人大に
志を結ぶ。此の流れも、あら境もあれバ、いつまでかく清拙を家と
詠むし俳諧の名目を今へて書を古に返さず。されバ今のその
巻てふ趣をやがりあしたれど、事を操家には、あらざれ共人滑稽を
も真ハ無ハ興ずる端のこと、かりそめにて、其葉にハあらざれば、

是をこそ法を巻と読人といふべし。發句てふものゝ縁てふ趣あれバ、脇
付沫及び続句を以ても、全く古に據あり。まさに體の有様の句ハ
咎めれバ、その中に聊正を詞ある事と志須べし。巻において、ハ此例も
すくなし。又俗談なる物いと興ずる僅くあるに戯の為となる。
凡て其のその面あり裏あり。字も表式ハ表嫌てふを中古よりハ人の手立
座式林のごとく。たとへバ造れる是を論ぜむも何の益かハ。又いかなる
人が此式を一トリつづれバ是も、おのれなかぞ法を定る人に
あらざれ。揉棋の圍におけるも法も式事多にして、何も定る
法及べき事にあらざれども、其事限りして、

すなはち俳式の多き事もしらずくらべて是を議じて是を喩すとも。なほ式は。
のこりしてかは用をかなへば
また連歌の式は中に。楔にして文字を二句五と七字発は本と云韻
とならば嬉へき事にあらず。楔の訓は姪子の訓異なるにはあらず。
さる時は聊詞の義にて字をなかく楔の訓を考ふる本を求むるかたちは事
なれども用あれども。唯旋もなき主たる歌式を定まく用ゐ。しとけるは是
まさしくには正しきは全く片歌を定めて日本は大和の言を喩し志給ふ。
喩し志給ふはなく正しく学ぶにおよびて八片歌の新古の故は
さ定には事と八異すれば詞は畧てそ紛の係とて定むべし

悔問　亦云く日本は言魂の助く国にして。唯詞のことをとて
心をあらはして文字のことはりにかゝはらぬと。大人のたまひしをあきらかにす
めたまへかし如何
〇諸答　問のごとく言魂の国にして。今やは片歌といへとも。唯詞
のこし文字は理をもて八勇く作らず。歌よみは文字をあらはさんとに
正字を書きて見るをもて、何事をも作にあらば。まことにかはなきを
てふやの中に宇の去りぬることにても字去の式によることなりば。
徳字をもて書きかはし定字をもてあらためのむかへよはえらびたるを。
もとより本てふやの詞を貫に。あまりに無益なのるなりだ。

せめて正字をよミとも志らでうたんハそれが為の益なしとぞやはり志らず
あるべきものなりしかして日本のことばの国とハ漢ハ字義をすてく
の意をいひしハ皇朝(ミカドノクニ)ハ詞のあやをもて情を述るを
片歌にてもしかなりしかるに晦集にも悉(コトゴト)く文字をあらため
書なるハいはゆる日本に用ゐるにいづれも漢土(カラクニ)の文字なれば
悪字(アテジ)をもひかへも正字を出たれど是を詞の助(タスケ)とせるにハあらで
本ハ正しきによらば今や又一字よりて正字をたゞしてもそれ迄
ある紙にハあらじ続く物産(ブッサン)にあづかる事とハ悉(コトゴト)く
せりと志るべしそれが中に世俗をもてうたふものをたとへて世俗でふ

俗語(ゾクゴ)ハおのれを代俗(セゾク)といふ文字に当(アツ)れどもいかなるかをしられど世俗
といふ字に出たるも此類の文字ハ言語(ゲンギョ)のうへ論(ロン)にも混(コンウ)ならん
世俗ともに代俗(セゾク)にも其べからじ嘘梅しきむしにてまつしきむしにてまつ
鄙(ヒナ)びたる詞(コト)に伝ひ此そが字もつくすれども椿(チン)をつかひたるとハ横(ヨコ)ざましおのれとし
むつかしきものハいつまでも仮名(カナ)にてかき出でうたんあやまちから
ぬべし

○論問　悪く聞ゆる事もあり久しく椿を津紙と読み山茶花を
さざん花とよみなども此類ひなるし今ハ此名を渡すべく改め俗となる世の
人よく喩(サト)さんや又にあやまりハ法にかへの如くすべきん志るべき

○誤字　文字おほしハ此度あらため考ならず。歌のうへとハ異なり。

文字をもて書かざるハ正字のうへを書べく記し。又久しく誤り写

きく見を改めざるも数おほし。誤とおもひ改めがたきもんやまるき

短歌にまじへ行ふにも今あらためん誤字義をもて意を得がたく

ならせ日読ものゝ書を美へ記し分改むるハ書ものになし。

字もまた本国の書ありて挍ひ相照（アヒテラ）して正字を出むにハ書くべし。

とのせしくして物産ハむつかしきハむかしのものも補綴とせてかゝる

照らし讀むぞ郷杖と名付ていふなりしるべし

とハ読むべし。飯に此数のまゝ書べし。書分に讀なれバ誤字をば

読やすきと思ひ書くゆゑ文字ハむつかしといへど、それハ世人の誤りし（ホニ）

あやまりなく正字のゆきとゞきなく、かくおぼゆる時ハ誤りハ

今ハ誤字（アテジ）をもて歌をよむはおとりかも。歌をもて詠むべし

○論問　それハ沖に瑞香花（ズイカウクハ）といひ沈丁花（ヂンテウゲ）と読み鶏冠花（ケイクハンクハ）とせて

鶏頭（ケイトウ）とよむ是ハそれハ字義（ジギ）なし。それも言葉をもてよむといふべし。是を誤りといはむ

○誤首　それ沈丁花（ヂンテウゲ）の字にかゝり、鶏頭（ケイトウ）の字に物の本ならず漢に

てハ瑞香（ズイカウクハ）をもて其のもし日のうちにハ沈丁花（ヂンテウゲ）とて物多きとなりぬ

首ての訓の偏に偏る（オチ）。又鶏頭ハ珍寶（チンジウ）の一名と日本にてハ

鬼蓮（オニハス）との鶏頭鶏冠（ケイトウ ケイクハン）字義の沙汰なれど、あやまりて鶏頭とし

鷄冠花ハけいとうといふ是かなしぞや鷄冠花に鷄頭の字を當べきことば
文字をもてよめるぞ鬼蓮(オニハス)となどよぶべし唯けいとうとよばるゝ
ためしなき字の詞とよびたいためを新たにきこえかくはなるまじ。
またれども編歴(カタムキ)に鷄頭ハ正に是漢音をいふどそハ漢音ふ
すらも解(ゲ)せざる人し漢音もハ漢去の音し唐人へハせ鷄頭(ケイトウ)と
いふべしキイデウといふたとへばよく日本人(ヒノモトノヒト)キイデウと呼べく
あるもの音なく唐にハ答べくハ唯キイデウとおぼえて候
のこし九月なれハ音といひ訓といひ漢音といひ呉音といひ郷(?)の
にハ紛れ呉國の人の耳にも西(?)の漢音すら漢土の人の耳にも

西せきも速に日本の話音訓し其本(モト)ハ韻鏡(インキヤウ)をもて考へ西土の里
とも本字ハ漢去にあらべき音におけば月なれ本の音なり。
何ぞ思ハれを漢音といふむ。たとへば菊ハ入聲(ニツシヤウ)の字なれバ
唐人音をキと云へども日の本の人ハ菊(キク)と云又菊てふ字に
訓(ヨミ)もあれバくの字を入たれバ日本の詞とハ五(カニ)ハ唐音なれども
この字を入れて日の本の詞とも桔梗(キヽヤウ)のたぐひをただし
おほしますかやうの片歌に於ける音訓の論文には及ぶまじ。
○攝問　古今集俳諧てふものに於べき人数をもしれ。論なくあらせ
おのく　さとし家よりそが中に貞徳宗因芭蕉あるべし。ことは

論ぜし時。其後支考麦林を出して此人くハるけおく筆せ。
西河ぶ路
○復答 貞徳ハいさゝかしてれバ季吟ハ歌学を以て家をなせされど
志の在く所異なる時や是ハ歌道ハ俳諧なりと別て俳諧ハ其道
無法の戯言と辞る場合に歌を解く時ハ正しく俳諧の時も
漫に云々も又思ひぬれバ俳徳をひらくべけれど季吟が俳諧
の家集あるを見れバ是亦句を有るに季吟とてにかくの
ごとくし余の人謹ろまこゝに去る支考志ハ全くして是ハ滑稽に
源をたゞし日外本の歌に背かじと此由来にはよく俳にふみ

賎しきに墜す芭蕉麦林ハ詞の出までも句ハ言に秀で席をあたへとも也
俳諧とのミ役す為し
猶問 志ろうば其句ハ芭蕉に至て麦林ふるうハむら
○復答 片づくるに定へらば其も時をして大に取捨あり是芭蕉
におけ時半ハ後世に毒をなすべし或ハ後世に業を残に
○猶問 審に定む
○復答 世に俳諧て其の広く行るゝハ芭蕉の後ゝ故に芭蕉
によらざる人なし実においてハおのゝ作時と後の識者
も芭蕉によ此句あまた許して芭蕉の毒をなさず所とも知

らば芭蕉ハ隠逸の人なり。俳しも末流も隠逸をこのむ俳諧也。
まて隠逸の趣となれバ是等の深きをくるゝのみ。叢林も又世にはすなれ
ど世の俳人芭蕉をもて祖とし其ふかき所に光芭蕉の毒を挙て俳諧
の誤とするなり。酒池肉林を正さむ
芭蕉におゐしと称せし所、俳諧のかハ、あまりにおちてむつかしき句とも多
かりき。実に一下り一等へさしまゐとの五言を挙るを定け
言ふに　下略
此みな文字俳諧を出情にもあらじ。そハ其重になしも詞をすこぶる言はゞ
とも深くるとしも俳諧を遊べくハするしむするとハ景ず深や、ゆえ

なも又事俳るなしど
卯花乎。令宿霧雨之娘水遊。
夜来猿叫路回児毛家母
七萬葉集にも詞の例あまたあれバ深きをかたちとせし是等を挙
にあらず正さむといふなむ

青志けり　同

青穀りの青なりくいづれにても詞をすぐれバ後の世は詞に滑らく
るじかく深にうれ人深とのつ

杰くれ紅や　同

蝶性さや　同

悪にそらく　同

かやうの五言をとこにゐすらんかにいふ所雅言(ガゲン)のりよる一句の調(シラベ)をなし歌さやうなげ見ゆるの類(タグヒ)はおぼえ侍るしおしこ下五言の響をうちくづし侍めのと続し紀詞し詞(コレラ)をうるをくず侍と竪(タテ)はこゝばのあやしふそし詞をすかく侍なるを只に挙(アゲ)侍をさけ

五下五言

山の笑ゝ　御選宗(ゴセンガウ)　誠濁(コリ)るる

門の墻(カキ)　てらしうぶ　小むらづくめ

稽古(ケイコ)にて　三布(ミノ)ぬらん　桑葉(トリカ)芳葉に

落取(オトリ)城(コシ)　出逢ひの　秀世の事

ゑまつまで　軒端(ノキバ)に　落(ラリ)るに

やぶれ家　料理(リヤウリ)仕間　世をそて酒

別座敷(ベツザシキ)　三月(ミツキ)越(ゴシ)　背中(セナカ)つき

蓮台野(レンダイノ)　茶の鉢　酒の鉢

男への羽　頭(アタマ)に

背戸(セド)の松　御字(ギヨウ)ことよ　背戸(セド)の菊

是の中に上にもつき軒端に男などは何の難(ナン)もあらねどもいふ人もあらむか上五の詞はつよりて侍るの言勢(ゲンセイ)をうしなひ侍事は勿論にして勿論すべきし軒端に男にの二ツも詞なさず侍。

字ハげに述るし

手洟かむ尼さん梅の盛の頃

こゝろ得あるや手洟かむハ何の事ぞ答ていはく自ら卑き者を去るのこ。
すべて美に耐られ懐紙を貯へず此ハ論なし木の葉にても用ふ
にても花をかむハ人の常の業なし然れども手洟かんでハ懐紙をもちゐ
あらず侘人粋まで案を抓て手洟をかむ水を投ち棄るをよしとせバ
手洟かむ手を知り給ふ侘人の為に此業を立なりとハ手を
詞をこゝろへしれとハ

誰人か薦着ていますれど花の春

世の人ひとあらためしとていつまでもあつらしき衣に飾らざりしが中に。
薦着てもしたら見て内證人もあらん誰人か薦着ていますると
字ゆ文章りあり　御世のまへに誰人か薦着て誰かん〳〵ゞれ給
新撰に飾り給ふならんも字ゆげに論する意の字にハあらず。
いましめの詞下賤の者に対してはうち詞にあらずしは字に思はへしまでかま
うちまてつらぬ我ハ物まで見まさくおのく崇め給ひ。
直の字は訓を童の物読するの詞に是れ孝るべしのこへに、
いまもとよませあらハ又いはれ毎いはれまでよむ。下ハ皆
あやまり読するはれ此の詞を知れべし

まくらしや草餅(クサモチ)の穂(ホ)に出つらむ

此句意ハ麦の穂出ぬこのころを摩(スリ)ぞろしく炒(イリ)たる粉を賤人(アカタビト)まで

くらしといふハ麦の雛(ヒヽナ)像あそびに草餅(クサモチ)てふものをつく酒

の意に、そが穂(ホ)と成て出つらむといふ意(イ)なるべし

近く芭蕉(バセウ)句解(クカイ)といふ冊子(サウレ)あるをよむに先(サキ)ハ椀(ワン)せし蒼(コモ)書考

いずれの句解にも殊更(リンレン)事を引ていふ大(オホイ)にあやまりとし殊更が

事を作りて誑人をとハ笑へきやずき按(アンジトコロ)る眼(ニナコ)もたがひる作りとかくば

かりにてハ何で笑(ヒド)るむ

まくらしの句の解にハ上臈(ジヤウロウ)を思ひしめすてとみるや枕草紙に

まくらしといふものハ人みなすてて?ことをあはれさ

ふきやうの名人なる事硯北の記に下略

あるまくらしといふものハ?ていずるものにいふ雛(ヒナ)郷

びとへの古くなるをのなるも何といふもの何てふものこそ広く

そのもの無せぬことのすし事枕草紙に名目ハ?ハ?く

まくらしやとばかりうちつけにおもむハ見る言(ゲンセイ)?は(クハ)?しから

ぬ事し芭蕉ハ何れんもなくまくらしを見てまくらしとおきて事

までなしかも作者(ヒヤウジヤ)の枕草紙を引て?にて文(ブン)ツ?く芭蕉の罪に

おせり古人にいふ?(タガ)は?ないあはれなる後の人眼(マナコ)をすて(タビ)?そて?さ。

ればこそ偶に偶をつけば。如何なる人も感じがたき句をつけの
句の例おかし。此ゆゑにあつかひに。静かなる句の
あはれなる事よ五言下五言等は何の事もなく何の事にかなしむなど。
晴くらき人はおもふべし。芭蕉の言葉は弟子なしとさる人はとてもかくても
一言にかなはずまし。又一編に芭蕉をさるこそ芭蕉は天下の人なれ
風雅の何の事ならぬあはれむるをしかたより人とうしろをいふも。
頼りてうまにかく句によろしくば後人はかるきは芭蕉の俳諧する事も。
後人雅句は芭蕉の毒にあたりなし。其趣如何となりともそこにぶら
まさまへる人なりば。何ぞかく此句を好まむ。是は毒なかな

ぜひにあらばや

又

瓜(ウリ)の皮(カハ)むいたところが蓮台(レンダイ)野(ノ)

内裏(ダイリ)雛(ヒナ)人形(ニンギヤウ)天皇の御宇(ギヨウ)とかよ

琴箱(コトハコ)や古きの店(タナ)の背戸(セド)の菊

御命講(オメーコ)や油のやうな酒五升

似合(ニアヒ)しや新年ふるき米五升

此たびは其上へ無量(ムリヤウ)の意味(イミ)ありとも何かせむ世に発句(ホツク)といふ
あまりかくの如く句を正すだいりんや書(カキ)てかざるものなき歌。

悪(アク)しき論ずべからず。俳諧の法といへば芭蕉を論ずるに及ばで
書林の高(タカ)ひくを見るべし

○難問 此頃世人に奇(キ)をこのませし芭蕉一世の名よくきこえしは
其方論ぜざるはなきや

○復答 秀今以て尚ハ論じて吾流の名をかくし深く其家の
集を撰(サンノリ)して自らに論せざる其徳も又いかにあらん

○難問 大人(ウシ)兼(カネ)て宣(ノタマ)ふ芭蕉における善(ヨキ)句おほしと其善(ヨキ)
といふ物を学む

○復答 善(ヨキ)るとハよく細かに依句作して其よも時の人を為(カツ)て芭蕉
の善(ヨキ)句にハ及びがたし。先今やその片がた上における芭蕉にあ
らそひしてすべき論ハあるまじ。其善句(ヨキク)るいふべくにくきぐあぐ（ゑ）
を出す

あかくと日ハつれなくも秋の風
猿海哉 清かうにをなき人ぞ
夏草や兵士(ツハモノ)どもが夢の跡
むざんやな胄(カブト)の下のきりぎりし
荒海(アラウミ)や佐渡に横たふ銀漢(アマノカハ)
五月雨をあつめて早し最上川

文月や六日も常の夜にハ似ず
稲妻や闇の方ゆく五位の声
山里ハ万歳遅し梅の花
ともかくもならでや雪の枯尾花
鶯や柳のうしろ藪の前
山路来て何やらゆかし菫草
雲雀より上にやすらふ絶頂かな
是等のたぐひいかにもあはれふかきが実におぼえねど

○独問　芭蕉のみを見給ふに。古きをきみを信じ。今おもむきの
ゑまえたる人の思ひ入ほどより異なるを知らず
○綾足　さればこそ情の帯とすべからず。故に浮世の片歌は底もいはむ。
せんおもへる筋に
小鯛さす柳涼しや海士が家
かはぐ流し小葱がうへの鯊の羹
夏菊も嘘一下河葉がひしかな
月きゆし精ハ石にもうちのぐ
涼しさを素肴にして袷ほし
さかさし馬唐ある草はたゆ

かゝる境にいりてハ世の人及ぶべきにあらじ

又

壺蘆や夜の厠に紙燭とる

此たびは謾にいひ捨るものにあらじ。只趣と詞ある拠や

よくかゝる人ぞといふべし

○梅問　余斯とせしとかゝる。予おもむきハ大凡如なり。古人の格を。

まゝ唐崎乃句を学ばで此木槿等ぞ守ゆゑる世の人まねを

あげたる句と様を。予辨別を守るべし

○綾答　是等の句。調を見る此ゆゑにとゞまらず。全く句を窺

の理を守りたいへしば法せむハ。皆云此葉をさりて落べし

梅問　予詞の劣る所しハ奈何

○綾答　先是ハ自悟らんずあしらば。試に此古人の唐崎木槿

等の句を読みに出せる所る道へあるべく義をもく清吟

せよ。詞おのづから修らん

○梅問　世に待宵をすてゝぬる古人の句は文多く短や

○綾答　待宵ハ宣の詞ふ限にあらぬ。此たびハ俳諧体る。

附る意の部分出せる所に付て俳諧てふものゝぶつこのゝ作。

唯いふて試さんに並て此せるて俳諧の出ずも捜しる。殿に參

これなき憂(ウレヘ)はなし
○物問 十六夜(イザヨヒ)・十七夜(タチマチ)・十八夜(ヰマチ)・十九夜(フシマチ)のたぐひ月の名目にいへる詞
なりや
○答 古においてあまた名も候へどもいさゝかは人の猶豫(ユフヨ)不定(フヂヤウ)の
意をもて歌に捨(ステ)字も用(ヒヤウカ)ゐ侍りし事を申は世の詞に依りて十六
夜の月をいざよふ月とし・十七夜をたちまちとし・十八夜を
ゐまち月とし・十九夜をふしまち月とし是はいにしへの定め
あり。○ただ歌に今やの片歌にはふか月ですべてさへつらへども是等(コレラ)の名
月は省(ハブ)くべきことにあれど月の字を入れずしてはかなはぬやうにすべし。

ありし古の片歌によまれて居たる詞をよみむかふことあらば是を先例に
考へあはせ知るべし今嫌ふ事中に
居待月(ヰマチツキ)・有明乃門(アリアケノト)・従者(ユハ)・暮去者(ユフサレハ)
も萬葉集にもあまれど古くいひ来る詞なれば八月の月を中秋八
はしたなくされど此月の名は定へかはりしたちまち哉し まちの月でふ
ともに古のならひをよみすなれど文萬葉にはたちまち誤りなされど
意のこれはそのつかひすてはとつばその詞なし源氏の物かたり
にも十六夜の月といふ事あまた記にして幾日(イリカ)くと宛(アテ)侍へ
後の世はまことに残すべし又其例を集まる月とよみ給ふ又

十五日出る月乃高々に

ともよみたる望月をもつぎさなる。十四日をこふ望月とハ後世の誹諧にしてあやしく侍く見ハさし。既日次の月と申けんハ秋月しらの花月なとハ是次の月にしてあはれなる

やはくと出るいはよし月の雲

ばるよくからなりといふむ。さんといふものかたりも文字の事なし。然に暁のはじめといふなる。鰕蟹不どの青き暁なれども縁をまべれども、ちつけにいざのひと云ふ滑ハ湿ハ温

○稀問 あれは望古によらく事を正すもとなお如何なるべき

○待答 律ハ片歌をよみしむ人なれば片歌をよまむ。既に志なれハ今も成ハ其事を正し読む志に、うひしく事の正したるを志ほたる今花の実といふ片歌をよまむれ。花の実ハそも何の事ぞといぶかしく思ひつるに、やつ六文出而ありやといふもぞ。中に今は片歌ハ言を上げ世にも至。中頃世にあるしいふく今やうの事も混じれども混じたる誹諧を思ほ是此をいふし和歌といふむ。今まで誹諧中の事を正しくすなれ。今まで御縁を一生しに及べハ今の事は菊に別れん。蓋し片歌より正すむとも話ものを源家ハ一なりん

○稀問 切し事を正さずして今までの誹諧であるのに拾ふるものハ。

それを好んで何とかいはむ
○後言　それもおのゝ好む所の事を宜とハいふべからず。されど
往古より今をいはむハ多く好む所にいはゞ漁楽に歌ふて[illegible]
ありしを今も用ゐるハ催馬楽をうたふて雅楽とすなり。
其外さハ散楽とて笛鼓にあはせて[illegible]ゆくハ猿楽といふ
うしろかたのしこゝハ古きを用ゐられ、並に盃の[illegible]。謡曲ハ上古の風の人の謡
あるによりて二曲ハ諸を[illegible]人の好むに応せず。片歌と漫るは俳諧を
何れの世にも諸々、天神地祇の神事の物多く[illegible]神楽を寄せよ
○梅問　鄙俗のうたを措て片歌と唱ふるに及でハ[illegible]を異

にまでほうり
○後言　為事をとしもかゝりて尊久しく此ことをもて是なるを
見まで其言詞文に記せり。今や片歌をもての何ハたゞふ
べき唯此ほかに作法なし
○梅問　国にもまた何かせむ
○後言　よし国にハ国々のうたありて人の生ずる
篇くしたるを好む人あり文詞の作を好む人あり又そや
かりをよむ人ありかりを好む人ある也[illegible]
もしいはゞこれを好む所に従ひて人ハ其好む所に従ふて[illegible]

よく心ある情境にもかなへば、才を撓め、志を曲げて、かく俗をかへむこと
いとおほいに衰へのたぐへ侍といふべし

○論問　文章はいかゞいふや

○後答　文章はふかく心に留し、道大やすくし、文かんを自然に
許六支考の輩、俳諧の文とかいふに一トふしをとめて、その流は遠へ至。
全く言の葉の文にあらじ、抑、文の體くはしく、すむにいふべきものなり
ずに綴べし、おなじ今や、片歌は古にもあり、常言にも散浚、
文章は和もおなじく、古にもおなじく、中古にもおなじく、おなじも一條に、
古き片歌をよむ人は文章もすこしも古にならふべし、今や、片歌

事、思ふ詞の多くを取りて、いづれも出来ぬ俳諧なれども、今の俳諧は
古の俳諧にして、たゞ人麿の集にも見ゆ
久有者、今七日許、早有者、今二日許
将有者
此たぐひ、今の俳諧におほかれど、今の片歌は文章に對る俳諧
あらんとおもふべし

○論問　今や片歌、音はすこしもあらず、文章は訓のみを用
ゐ侍らむ

○後答　おにいはずとも、訓といひ、音といひ、聊かもあらば

されど常用語ハ此詞にして更に異国(イコク)の音ともあらざれバたとへバ
片歌の詞に幡蓋(ハタクワ)も孔雀(クジヤク)も千太刀(センタチ)も強力(ガウリキ)も此字を言葉を集
まじなハず文章ハ詞花なれバ自然にいにしへをしたひてよろしくよ
物を別(ワカツ)べくも是自然に文との違ひあるし

○難問 雑言(ザフコト)にも正不正あらんこれを別(ワカツ)にハ奈何(イカン)ぞせむ

○續義 片歌をもて正とし不正にハあらず
それ片歌ハみやびを旨とひろびを旨として国々の詞も集め用ひて
余(ヨ)なむ意にハ其国々の詞さへなれバ先今悉(コトゴト)くぬきいだし是も皇
よく源を正してうつし学びて知る者にハあらじ

跋

かく宗匠の語らひし二夜ばなしハ諸のみちの弟子たちあつめてあら室(ムロ)に
いざなはれし家人ハ片歌よまむとてあそびやしろにてかたりし其半
夏竹のあさぬしをはじめとしてみやび人いとはやりたれど是ハ先ずに
其ハまだうひうひしきにといふべし保(ヨ)くいとうけまなびたまはむの
ことばあやをなさばいひしまにくゝ人のうつせるものにぞ

寶暦十有三癸未仲春二月

吸露菴 あやたり

蟖まるはま鏡ひて遠くや蟷　竿　黄牛

見ゆるびにうしろ姿ぞなくござれ　麦汀

連立て恥しからじ妹や夕紅葉　双瓜

淡墨(ウスズミ)さへ人になる里の雪夕くれ　笑洲

物にしても接ちはやし罌粟(ケシ)の花　胡暁

夏ハ名の高い坂あり腹脂(トコロ)菜(ニアン)　亂鶏

水蒼ぬ沈えて西時やかささはだく　露圓

菜碇ずけ捷(セセ)う秋しためむし路　樹蜂

蜩(ヒガラシ)やりよの声まひまん一里塚　燕山

赤坂(アカサカ)穂(ホ)花や姑の好くて結に縫(サ)く　里橋

ぬこまろに家はつくさや布穀(カンコーリ)　吹雁

券うし息の見へもく蛍いのは　平胡

見つけても動(ナゴ)かぬ杜(モリ)や蝶の一家　梅卿

萩咲くを梅じて秋渡る百合は花　可笑

目につきし秋の流れし蛍う郡　東奴

灌佛や漏(モリ)そうな蚤蕗蓮て秋　女 星露

四季

遊でゆくやうなるあ里は聾(アレフツリ)　素輪

採策に花とちらして新葉かな　仝

熱肉や目のまに人屋てゆく　仝

壊ひし姓や習める膝の屋とて涼　仝

篠魚を忘れて逢はけらしな　破了

纈て幽さやし分寺あ里山けらし　青藍

吹ゝ飛ニて杉に一首や山さくらし　東起

あ添じはち法本うむおはくたるを
さハ何しが香の夕にハとくるを

餘の跡も伐らむ心をまし道けらし　吸露菴